

第7章

ブラジルとアルゼンチンにおける政党政治の変容と民主主義

——州レベルの「伝統政治」という視角からの考察——

出岡直也

はじめに——ラテンアメリカ政治の分岐の中での
ブラジルとアルゼンチン——

ラテンアメリカ諸国は、1980年代から、民主主義への移行と新自由主義改革ネオリベラルという「二重の移行」を、ほぼ共通して（キューバを大きな例外として）通過した。その後、世紀転換期頃から、多くの国で「左派的」とされる政権が成立し、または、「左派的」とされる勢力や候補者が選挙での得票を伸ばし、ラテンアメリカ政治の「左傾化」が言われる時代が到来した。そうした大きな傾向での共通性の中で、国による相違も重要だろう。移行後の民主主義の安定度にも質にも差が大きく、新自由主義改革がどの程度進むかにも差違があった⁽¹⁾。「左派政権」続出の時期に入って、分岐がさらに明確になったように思える。「急進左派」と分類されることの多い政権は民主主義が不安定だった諸国に登場し（2006年大統領選挙において急進的な左派勢力が勝利の可能性がかなり現実的であったペルーも）、左派政権登場後も政治の分極化の形で、不安定が継続するか強化されている。それに対し、「穏健左派」とされる政権は民主主義が安定する諸国に成立している。

この差違は、政党と政党システムのあり方と——民主主義におけるそれらの重要性からは当然とも言えるが——密接である。前者のベネズエラ、ポリ

ビア、エクアドル、ペルーにおいては、従来の政党システムが極端に流動化した中から、急進的な左派的政策を説く新しい指導者が登場して政権を握った（あるいは、その直前まで行った）。しかも、ボリビアを除いては、そうした指導者は政党の制度化に積極的ではなさそうである。後者の代表はブラジルやウルグアイ（それに、中道左派連合政権ではあるがチリ）だろうが、特にブラジルは、民主主義の持続の危機も議論された状況から、その安定が当然視される状況への変化（Kingstone and Power [2008: x]）が顕著であり、後述するように、「政党の弱さ」と政党システムの制度化の低さが特徴であった状況の脱却という政党政治の領域での変容が、それと並行して起こった。

この分岐の中で、民主主義の安定度、政党システムの流動化の程度、左派政権が反新自由主義経済政策を採用する程度など、様々な側面で、その中間にアルゼンチンがあると考えられよう。急速で極端な新自由主義改革、民主主義の危機、新自由主義に強く批判的な政権による新自由主義改革の部分的逆転（宇佐見 [2006]）という経緯を辿った。そして、極端な新自由主義改革を行った政権とそれを逆転させた政権は、人気取りの目的が強いとされる攻撃的な政策を突発的に提出するのを特徴とし、「委任民主主義」と概念化もされる権力集中を多くの研究者が指摘する（例えば、宇佐見 [2008: 154] や Schamis [2006: 28]）。こうして、同国の民主主義の不安定と質の悪さが目立つが、その基盤に、先記両政権ももの政権党だった政党の性格、そして、その政党のみが他政党を圧して強力になるという政党システムの変容⁽²⁾があると考えられる。

民主主義崩壊の危機さえも視野に入り、その政治の分析に、政党政治の外と考えられる領域の考察が重要になる中央アンデス諸国の状況は本書第8章のテーマであり、本章では、狭義の政党政治に関わる分析により適した分岐を取り上げる。すなわち、穏健な改良的政策と民主主義安定化とを特徴とするブラジルと、攻撃的言辞を伴う、予測可能性の低い政策転換と民主主義の困難の継続とを特徴とするアルゼンチン⁽³⁾を代表とする分岐である。

両国の政治変容に関する非常に重要な視角が、州レベルの政治体制と全国

レベルでの政党政治が——後述する「伝統政治」を介して——関連する領域への着目ではないかというのが、本章の仮説的結論である。本章は、以下の構成により、両国政治に関する研究動向が、その仮説へと統合できることを示したい。まずラテンアメリカ政治、及び、本章で扱う2国の政治に関するいくつかの研究動向を整理して、州政治の特性が、政党のあり方を媒介変数として、両国の政治を強く規定してきたことを明らかにする。そして、そうした特性ゆえに、それぞれの国における政党及び政党システムの大きな変容、特に現在の大統領の政党に関わる、州政治を重要な舞台とする変容が、両国の民主主義のあり方をかなりの程度規定しているとの解釈を提出したい。なお、後に述べるように、「伝統政治」が両国の政治を既定する力学が異なるため、2国が扱われるが、一つの仮説の検証のための比較ではなく、並列的である。しかし、筆者の期待では、それは重要な一つの論点を浮かび上がらせる並列である。そして、後述するように、「伝統政治」の重要性は多かれ少なかれラテンアメリカに共通するため、その視角からの考察が特に重要であると思われる2国を取り上げた本章が、地域一般に関しても何らかの示唆を与えられるかもしれない。

第1節 本章の視角設定

ブラジルとアルゼンチンの分岐の原因を探求する中で、両国の州レベルで見られる古くからのボス政治という、一見周辺的な領域の重要性に気づいたのが本章の考察の出発点だった。その領域は、ラテンアメリカ政治における伝統的支配層のパワーというテーマの一部である。よって、本章の考察には、そのテーマを扱った政治学文献で提出された概念や分析枠組が役立つことが期待される。本節では、同テーマの研究の簡単なレビューを行い、本章の視角を設定したい。その作業は、ラテンアメリカ政治全体の中での2国の位置を明らかにし、本章で扱った視角から、冒頭で設定した同地域政治の分岐の

総体を考察する意義を示唆するものともなろう⁽⁴⁾。

ほとんどの国で民主主義が維持されるようになった時代のラテンアメリカ政治における、多くの場合大土地所有に基盤を置いて財をなした伝統的支配層——同地域ではオリガルキア（寡頭支配層）の語が定着している——の大きな権力の残存というテーマについての考察をリードしたのは、米国の研究者F・ハゴピアンであろう。

ハゴピアンの関心の出発点は、ブラジルにおいて、伝統的支配層がいかに権力を維持し、発揮しているかを明らかにした実証的研究であったと思われる。それは「伝統政治」(traditional politics)と概念化される（その定義などは、Hagopian [1996a: 14-20]）。伝統政治⁽⁵⁾は、政治権力が狭く集中し、政策決定へのアクセスが限定され、政治的代表のチャンネルがヒエラルヒー的に編成され、政治的競争が厳格に規制されている点で、権威主義体制の一種であり、「家族外のメンバーも政治的友誼やコネクションを通して参入できるが、かなりの程度親族関係を通して相互に結び付いた [...] 伝統的政治エリート」(traditional political elite)（強調省略）による、「多くの場合家族に基盤を置いた個人間関係を強い特徴とする (highly personalized) クライエンテリズムのネットワーク」を通しての支配であると定義される。伝統的政治エリートの存在や、それがどのような人々を指すかは、ブラジルでは常識的な知識であるとされる。

そうしたブラジルの状況を強く念頭に置いてラテンアメリカ一般について提出されたと想像されるのが、伝統的支配層——ここでのハゴピアンの用語は「伝統的エリート」(traditional elite)——のパワーが民主主義のあり方を大きく（悪い方向に）規定しているという議論である（Hagopian [1996b]）。同地域における伝統的支配層のパワーの残存と民主主義のあり方との関係に関するハゴピアンの議論を筆者なりに命題化すれば、次のようである。伝統的支配層が強力であるほど、より正確には、伝統的支配層が民主主義を通して強く代表されているほど⁽⁶⁾、民主主義の質は悪くなり（ハゴピアンはその表現は用いていないが）、社会経済的不平等は正されず、民主主義は空洞化し、

大衆層が民主主義を拒否する結果を生み、政治的不安定にもつながりやすい。その考察においてハゴピアンは、アルゼンチンを、都市に基盤を置く社会層、特に労働者などの層の組織化の成功によって、伝統的支配層の権力がそがれた事例の一つとし、ブラジルを、エルサルバドルやグアテマラほどではないにせよ、ホンジュラス、コロンビア、エクアドルと並んで、その権力が強力に維持されている国であるとしている (Hagopian [1996b: 69-70])。しかし、前節で述べた両国での民主主義のあり方は、ハゴピアンの命題とは逆になっているとも言える。同命題が直感的にも正しいように思えるため、このパズルは非常に重要だろう。

ハゴピアンの議論では、一方でブラジルを——伝統的支配層のパワーが強いために質が悪いとはいえ——民主主義体制であるとし、他方で同国に強く残存する伝統政治を権威主義体制であると規定することの間に、齟齬が存在する⁽⁷⁾。この齟齬は、サブナショナル・レベルにおける伝統的支配層の、多かれ少なかれ非民主主義的な性格の強い政治が、全国レベルにおける民主主義の質の悪さと関連しているという理解⁽⁸⁾によって解決することができる。実際、ハゴピアンがブラジルにおいて伝統政治による統治が行われていると想定しているのは、基本的に州レベルの政治である。上記の概念化からも、彼女が、オリガルキアに出自を持つ少数の一族が州政治を支配する状況を、伝統政治の典型的なパターンとしてイメージしているのがわかる。先記のような人的ネットワークに基盤を置く政治は都市化が進んでも見られるというのがブラジル政治研究の通説のようだ⁽⁹⁾が、農村部の強い個人間関係に基づく性格が強いものほど、非民主主義的な性格が強いことは容易に想像できる。ハゴピアンが伝統政治と呼んだような政治がブラジル内で強固に残ってきたのが、北東部・北部の貧しい諸州であることにもコンセンサスがある。

「州レベルにおける非民主主義的な性格の強い政治」と「全国レベルの民主主義のあり方」との同様の連関——周辺の諸州における古いタイプの非民主主義的ボス政治が、全国レベルの政治を大きく規定してきたこと——は、アルゼンチンにも共通する。本章は、その共通性に着目した上で、それに関

わる特徴がいかに変容してきたかに焦点を当てることで、先記のパズルを解く試みである。なお、以下で述べるように、両国ともに、サブナショナル・レベルの政治と全国レベルの政治を連結するのに決定的に重要なのは政党政治であり、この連関の重要性の基盤にあるのは、全国レベルの政治に周辺の地域の利益が極端に過大代表されているという、両国政治に共通する特徴である。

ただし、「伝統政治」とされる州レベルの政治の具体的なあり方について、ハゴピアン概念は曖昧である。先記の支配のあり方の性格付けと権威主義体制とすることの間の違和感、また、ブラジルについて、地方レベルでの政治の実態を詳しく扱わずに、民政移管後の伝統政治の残存が語られることに示されるように、どの程度、そして、どのように非民主主義的なものを指すのかが明確ではない。

近年研究が進みつつあるサブナショナル非民主主義のテーマの中で、両国について提出された分析が、それを補完・修正するのに役立つ。まず、C・ヘルバソーニによる、アルゼンチンの非民主主義的な州政治に関する分析(Gervasoni [2006: 14])が例示的に列挙する政治手法が、様々な地で広く行われていることは、ラテンアメリカ政治研究者には常識的な認識だろう。ローカル・メディアをコントロールし(所有により直接的に、または、広告停止の脅しなどにより間接的に)、公的資金をキャンペーンに用い、州官僚組織の職を得る条件として知事への忠誠を強いたりする手法である。ブラジルのサブナショナル非民主主義についてのA・モンテーロの論文(Montero [2007])が、警察による超法規的殺人を指標とする⁽¹⁰⁾ように、反対派への嫌がらせや暴力が広く行われているのもよく知られている。以上のような諸手法が統治に重要である程度に応じて、民主主義的なものから、ほとんど競争性が存在しない支配に近いものまでの連続体の中に、州レベルの政治体制が並んでいるという認識(概念化)を行う点で、本章で扱う2国に関する、このテーマについての(先駆的に提出された)体系的な考察は共通している(これまで参照してきた、ヘルバソーニとモンテーロの研究)。

人的なネットワークに基づくクライエントリズムと抑圧との混合により、ある程度以上に競争性が低い政治が行われている州が（周辺的な地域を中心に）両国には多く存在していることを前提として、それを「伝統政治」と呼んで、以下の議論を進めていきたい。なお、ここで述べるような伝統政治からの脱却はラテンアメリカにかなり共通した課題である（あるいは、あった）ように思える。

政党政治が州レベル政治と全国レベル政治を連結する領域がいかに重要かは、それぞれの国の政治で最大の問題と考えられる特徴が、そこからかなりの程度説明できることで示される。よって、以上で述べた視角からの考察には、2国ごとのコンテクストを踏まえて、政治変容を解釈することが重要になる。前述したように、2国の政治変容を概観したあと、「伝統政治」と政党政治とが連関する領域が、それぞれの国の政治をいかに規定してきたかを紹介することから、本章の考察を始めるのはそれゆえである。

なお、以上述べた視角は、二重の移行後のラテンアメリカ政治における「クライエントリズム」という重要なテーマと密接である。民主主義が維持されるようになっただけでなく、新自由主義の時代になって社会＝国家関係にも大きな変容が見られ、国家が経済で重要な役割を果たす輸入代替工業化の時代のコーポラティズム的な組織政治が弱まったため、クライエントリズムも弱めるような、より自律的な参加に基づく政治の登場が期待され、観察されてきた¹¹⁾。他方で、組織政治の減退は、クライエントリズムを強化しているともされる¹²⁾。クライエントリズムからの脱却が言われる場合の代表的な国が、民政移管の頃から、様々な新しい社会運動（新しい労働運動の登場も含め）、そして、それに基づく新政党が台頭したブラジルであり、その強化が言われる場合、代表的な事例とされてきたのがアルゼンチン（明白な最大政党となった政党が、都市部においてもクライエントリズムに基づく党へと変容したことが、クライエントリズムの強化とされる）¹³⁾である。この対照性は、前節で述べた両国の対照性と関連していることが想像される。したがって、それらの政党の、クライエントリズムと大きく重なる側面に焦点を当てた本

章の考察は、ラテンアメリカ政治における「クライエンテリズム」に関する錯綜した（概念の混乱も含め）研究動向にも一つの示唆を与えることも期待されるが、考察には別稿を必要とする重要なテーマであり、以下では試論的な言及を行うに留めた。

第2節 両国の経緯の概要

まず、民主主義への移行の時期からの2国の政治史を簡単に概観したい。長期軍政ののち民主主義の下で政権の交代が行われる中で、新自由主義改革（民営化、規制緩和、国内市場の開放など、市場原理を重視した経済への移行）がなされ、その後「左派」とされることが多い政権が成立した点での共通性も大きい両国だが、経緯の詳細、そして、「左派政権」を担う政党の性格はかなり異なっている。

ブラジルでは、1985年に民政移管し、1989年に民主主義的な大統領選挙が再開して以後、1970年代後半から強くなった新しい労働運動などを基盤として軍政末期に成立した、マルクス主義的な部分を大きく含む労働者党（Partido dos Trabalhadores）の候補が得票を伸ばしていき（労働者党が少なからぬ地方自治体の首長選挙で勝利し、政権を担当したのと並行して）、2002年の選挙で勝利し、政権を取るに至った（労働者党の勢力拡大など、ブラジルの選挙結果の推移は、表1）。結党以来の中心的指導者であり、ルーラの愛称で呼ばれるダ・シルヴァ（Luiz Inácio “Lula” da Silva）大統領は、2006年の選挙で再選された。

同国で新自由主義改革を担ったのは、先記1989年選挙で勝利したアウトサイダー的な右派政治家が腐敗スキャンダルで失脚し、憲法上の手続きに従って副大統領が大統領となった政権の大蔵大臣として、そして、その経済政策の成功での支持を背景に1994年選挙に勝利した後には大統領として、政策を展開したF・H・カルドゾ（Fernando Henrique Cardoso）であった。労働者

表1 ブラジル各党の勢力

		PMDB	PFL	PSDB	PT	PP	PDT	PTB	PSB	PL	PPS	その他
大統領選挙 得票率 (%)	1994	4.4		54.3	27	2.7	3.2					8.4
	1998			53.1	31.7						11	4.2
	2002			23.2	46.4				17.9		12	0.5
	2006			41.6	48.6		2.6					7.2
上院議席 率	1994	27.2	22.2	13.6	6.2	7.4	7.4	6.2	1.2	1.2	1.2	6.2
	1998	33.3	19.8	24.7	8.6	6.2	2.5	0	3.7	0	1.2	0
	2002	25.9	23.5	14.8	16	2.5	4.9	2.5	4.9	2.5	1.2	1.2
	2006	16	24.7	16	14.8	1.2	6.2	6.2	4.9	3.7	2.5	3.8
下院議席 率	1994	19.6	15.1	9.1	8.8	10.8	8.4	6.9	4.2	4.8	0.3	12
	1998	16.6	16.2	14.5	8.6	10.1	6.2	7.5	4.4	4.7	2	9.2
	2002	12.5	11.5	13.1	13.9	8.8	5.9	5.9	5.6	5.8	3.9	13.1
	2006	15.6	11	14.6	11.8	5	6.4	4.6	5.7	3.2	4	18.1
州知事 実数	1994	9	2	6	2	3	2	1	2	0	0	0
	1998	6	6	7	3	2	1	0	2	0	0	0
	2002	5	4	7	3	0	1	0	4	0	2	1
	2006	7	1	6	5	1	2	0	3	0	2	0

(出所) Santos and Vilarouca [2008: 64] から抜粋。

(注) 本文で紹介されない政党は次の通り (性格付けは、基本的に Montero [2005], PP/PPB は Mainwaring et al. [2000] による)

PP: 進歩党 (Partido Progressista): 農村部を支持基盤とする右派政党, 1995年以後はブラジル進歩党 (Partido Progressista Brasileiro, PPB)

PDT: 労働民主党 (Partido Democrático Trabalhista): ポピュリズム的性格の強い左派政党

PTB: ブラジル労働党 (Partido Trabalhista Brasileiro): ポピュリズム的性格を持つ中道政党

PSB: ブラジル社会党 (Partido Socialista Brasileiro): ポピュリズム的性格を持つ中道左派政党

PL: 自由党 (Partido Liberal): 経営者層とプロテスタントを支持基盤とする右派政党

PPS: 社会主義人民党 (Partido Popular Socialista): 伝統的マルクス主義の政党

党は、かつては「社会主義」を説く急進的な政党であったが、ルーラは、カルドーゾの政策を基本的には維持することを綱領として政権に就いた。

アルゼンチンでは、1943年のクーデタとそれで成立した軍政の中心人物の一人であったファン・ペロン (Juan Domingo Perón) を擁立する形で結成された政党を基とし、選挙で勝利したペロンが上から築き上げた政党として、ペロニスタ党が登場した後、それまでの最大政党であった急進市民同盟 (Unión Cívica Radical) との二大政党制が形成された (ペロニスタ党が選挙に参加する

ことを軍が禁止する時代が続いたため、選挙結果には現れないことが多かったが)。軍政の労働担当の役職からも、大統領としても、ペロンは労働者寄りの政策を行い、また、従わない労組の冷遇や弾圧も組み合わせ、自らを支持する形で労働運動を上からほぼ一元化(組織化の進展も含め)することに成功した。ペロニスタ党の都市部における支持基盤になったのは、その労働運動であった。なお、ペロン政権がクーデタ(1955年)で倒されたのちの軍政でその名称は禁止され、以後は「公正主義党」を意味する“Partido Justicialista”が名称となったが、ペロンの政治運動・思想、すなわち「ペロニスト」の形容詞(また、ペロン支持者、ペロニストを構成する人々)が「ペロニスタ」であり、同党を「ペロニスタ党」と呼称するのも一般的である(以下では、通例に従ってPJと表記する)。

1983年の民政移管時の大統領選挙に勝利したのは急進市民同盟候補であったが、ハイパーインフレ等による不人気から(任期満了よりも少し早く政権を移譲するほどであった)、次の選挙ではPJのC・メネム(Carlos Menem)が勝利して政権に就く(1989年)。PJの従来立場や選挙公約から人々が期待・予期していたものと180度異なると言える新自由主義改革を行ったのはメネム政権であった。インフレの収束と経済成長により、その政策が広い支持を得、大統領任期を6年から4年に短縮して連続再選を可能とする憲法改正を経て再選されたメネムだが、腐敗と失業の増大の方が人々の関心事となって支持を失い、腐敗批判を前面に打ち出す中道左派の新政党(政党連合)が力を伸ばした結果、その新党と急進市民同盟の連合が1999年選挙で勝利した。しかし、同連合の政権は、経済政策の側面では、失業の拡大などに関して不満が増していた前政権の新自由主義路線を継続し、政権内の対立もあって反腐敗などの期待は満たせない。メネム政権期以来、自国通貨と米国ドルの為替レートを1対1で固定していた無理¹⁴⁾などによって経済状況はいよいよ悪化し、結局は2001年12月に、銀行預金の部分的封鎖の措置をきっかけに、アルゼンチンは各地で暴動的状況が起こる危機に陥った。大統領の辞任後も、暫定大統領が短期で連続する大きな政治危機に至るが、民主主義は維持され

た。この危機・混乱を経て、急進市民同盟はかつての勢力を全く失った弱小政党となり、元来が連合体であった先記新興政党は事実上消滅した。

こうして、大統領選挙に勝利する可能性のある有力政党がPJのみである状況が出現した。先記危機で成立した、PJ政治家による危機管理的政権の下で行われた2003年選挙では、PJから複数の候補が争った（他に、有力候補としては、急進市民同盟出身の2名の独立候補のみ）。最大得票を得たのは24.5%のメネムであったが、決選投票での敗北が予想されたため、彼が辞退した結果、22.2%を得ていた第2位候補のネストル・キルチネル（Néstor Kirchner）が大統領となる。このようなキルチネルの勝利はアルゼンチン有権者の左傾化の結果とは言いがたいが、新自由主義、及び、それを政策とした彼以前の政権（特にメネム政権）を強く批判し、国家の役割や規制を再び強化する方向の政策を取った彼の政権は人気を集め（経済の好調も支持の理由だった）、2007年選挙では、その妻のクリスティーナ・キルチネル（Cristina Fernández de Kirchner）が勝利して政権に就いた。

第3節 ブラジルとアルゼンチンの政治の共通性についての一視角——政党政治、「強い連邦制」、サブナショナル・レベルの「伝統政治」——

本章で扱う両国において、周辺的な諸州に強く残存する古いタイプのボス政治の役割が特に大きいには、制度的な背景がある。本章で扱う側面での連邦制研究をリードしてきたA・ステパン（Stepan [1999: 24]）は、「世界の民主主義的な連邦〔連邦制を採る民主主義体制〕の中で、この〔上院での極端な〕過大代表の様式を下院でも複製しているのはブラジルとアルゼンチンのみである」（〔〕内は引用者注）ことを明らかにしていたが、表2も示すように、そのことは、厳密な指標を用いて西半球の4つの連邦制の国（ベネズエラは除き、米国、メキシコと両国）を比較した研究でも確認されている（Gib-

表2 各国の過大代表

	国	州の数	分布幅	最小	最大	平均	標準偏差
上院	アルゼンチン	24	19.73	0.11	19.84	3.44	4.07
	ブラジル	27	25.8	0.18	25.98	3.93	6.1
	メキシコ	32	7.8	0.26	8.03	1.96	1.8
	米国	50	21.89	0.33	22.22	5.24	5.3
下院	アルゼンチン	24			9.59	1.85	1.8
	ブラジル	27	9.89	0.63	10.52	1.92	2.31
	メキシコ	32	0.79	0.91	1.7	1.04	0.137
	米国	50	0.56	0.72	1.28	1	5.3

(出所) Gibson et al. [2004: 176].

(注) 全国人口中の州人口比を分母、全議席中の州の議席数比を分子として算出した値。1より大きければ過大代表、1より小さければ過少代表、1であれば州が人口比に応じた議席配分を受けていることを示す。

son et al. [2004: 175-177])。また、別の測定法でラテンアメリカ諸国一般の上院・下院における代表の歪み(不当配分, malapportionment)を測定した研究も、両国の両院でのそれが極端に大きい¹⁵⁾ことを示す(Snyder and Samuels [2004: esp. 132-133])。すなわち、両国においては、人口にかかわらず州からの同一数(ともに現在は3名)の議員が選出される上院のみでなく、下院でも、各州で最低限の議員数が設定されているため、周辺の州が大きく過大代表されている¹⁶⁾。さらに、選挙、財政、政策決定上での州の自律性の点でも、2国の連邦制は、メキシコやベネズエラとは異なり、州レベルの政治が全国レベルに重要な位置を占める「強い連邦制」と呼ぶうる制度であることが指摘されている(Benton [2003: 105])。

それらの結果、周辺の州の政治家が、連邦レベルの政治で非常に重要な役割を果たす。特に各州の指導的政治家、多くの場合は州知事の権力が決定的であることが明らかにされてきた。興味深いことに、両国におけるその力学は大きく異なる。下院において州を選挙区とする拘束名簿式の比例代表制を採用するアルゼンチンでは、名簿を決める州レベルのトップリーダー(その党が州知事を出している場合は、州知事であり、そうでない場合も1人あるいは少

数のボス)が決定的な権力を有する (Jones and Hwang [2005: esp. 121-123])。それに対し、各州が選挙区の比例代表制だが、非拘束名簿式であるブラジルでは、各政治家個人が選挙を争い、支持獲得の主要手段がパトロネイジ¹⁷⁾であり、その配分をコントロールする州知事の権力が強い(後記のように、政治家達は政党を軽視して州知事に従う)というのが通説的な解釈であった。こうして、両国それぞれの制度的特徴が、州レベルの政治ボスに強大な権力を与え、特に周辺州のボスは連邦政治レベルで過大な権力資源を持つ。連邦政府は、自らの政権基盤のために、州選出の議員達をコントロールする州の政治ボスに頼るが、特に周辺的な州においては、そうしたボスは非民主主義色の強い政治を行うのを特徴とする。本章では、その実態の詳しい紹介は行えないが、先にハゴピアンの伝統政治の概念を検討する形で示したように、ある程度以上に競争性の限定された政治が、親族・友人達の限られた人々に権力が集中し続ける形で行われているような場合を典型とする統治が、両国の州レベルでは広く見られてきた。

ブラジルにおいて、本章で扱う時期に比べても、軍政(1964~85年)以前の民主主義——連邦レベルでの行政府に対する立法府の権限がより大きい憲法体制であり、急速な経済発展が進む以前の時代——下で、伝統政治がより重要な役割を果たしていたことについては、多くの政治学者が当然の前提としている。中央集権化を進め、政治の刷新を志したはずの長期軍政が、実際には「伝統的政治エリート」に依存していたため、その権力が保たれたことが、特にハゴピアンの研究によって、明らかにされた。

民政移管後のいわゆる「新共和国」時代のブラジル政治に関する研究の蓄積は大きいが、そこでの通説的な解釈を図式化・単純化してまとめると次のようになろう¹⁸⁾。政党は、それぞれがパトロネイジのマシーンを基盤とする政治家からなる。政治家達は、州知事が握るパトロネイジ資源の分け前を求めため、党規律は弱く、党籍変更が広汎に行われる。イデオロギーや政策で形成されず、組織的にも弱体な政党が特徴となる。選挙制度も理由として、

分断的な多党制が特徴となる(表1)。こうした相互に強く関連する特徴から、利益・意思の結集ができず(言い換えれば、拒否権プレイヤーが多数存在し)、連邦政府の政策決定能力が低く、改革的・刷新的な政策が行われない¹⁹⁾。この力学において、周辺諸州の伝統政治による政治家達が中核的な役割を果たすが、この力学の結果、伝統政治を破壊するような改革はなされない、という悪循環²⁰⁾が指摘されてきたと言える。

民主主義の政治体制においても大きな社会経済的不平等が解消されない基盤に、そのような政治がある、というのが、通説的なブラジル政治解釈の一つの側面だった。政治学的な分析は、上記の制度的基盤を重視する中で、拒否権プレイヤーが多数存在することや、政治が分断化され、人的ネットワークに基づく断片的利益の追求がなされること²¹⁾を重視する傾向が強い、という印象を筆者は持つ。しかし、それを担う政治家達が、党籍変更を容易に行い、政党をイデオロギーに基づかない、弱体なものとし、クライエンテリズムを用いて支持を獲得するという特性を持つのみでなく、社会的改革を嫌悪する保守的な政治エリート層であることを考えると、通説が重視する特徴が、社会経済的不平等の継続というブラジル政治の最大の問題点の一つを生んできたことは、より理解しやすくなる。

ただし、民政移管後のブラジル政治について、以上まとめたような、ある時期までの通説には、強い修正解釈^{リヴィジョン}が提出されている²²⁾。それに関しては、2つの点を指摘する必要がある。

第1に、修正解釈の核心は、主に議会政治の分野での分析により、規律が決して弱くない諸政党による連合を形成する大統領が、政策遂行を阻害されていないことを示すことであり、拒否権プレイヤーが多数存在するとの解釈の否定である²³⁾。しかし、この解釈は、先に示した通説的な理解における、州レベル政治の性格付けの部分とは必ずしも矛盾しない(なお、ブラジルにおける各政党の議会議席数の推移と大統領による連合形成については、表1と表3)。人的ネットワークが重要な役割を果たすクライエンテリズムに基づいて選出される政治家からなる政党は、大統領の議会における多数派連合を形

成しうる²⁴⁾。それどころか、先記のようなブラジル政治家・政党像は修正解釈の重要な要素になりうる。修正解釈寄りの分析を行い、紹介する論文(Santos and Vilarouca [2008: esp. 69-70])²⁵⁾は、州知事が州選出の議員を強くコントロールするために、州選出の議員団が重要な連合の要素となりうることや、かつての議会とは異なり、「新共和国」においては、大統領の議案提出権が強化されたことで、大統領が議会で支持を集める上でパトロネイジが重要な役割を果たしている、などの解釈を示している。ただし、州知事の権力と比較しての全国レベルの政党指導者が強力であるという知見は、伝統政治の継続を否定する議論との親和性が強い。しかし、議会での議員達の投票行動の分析によってその知見を得たとする研究(Cheibub et al. [2009])が正しいとしても、それは、州知事の力の大きさは認めた上で、それが従来言われていたほどは強くない、投票行動を州知事の利益になるような形で行っている側面も強いが、政党指導部の指示に従う側面の方がより規定的である、と述べるものである。

第2に、修正解釈が取り上げた点についても、それを「新共和国」の時期を通じての特徴付けとするのは問題があろう。少なからぬ場合に、「通説」と修正解釈は、この時期全体についての解釈として出され、対立してきた。しかし、後に検討するように、筆者には、この時期の途中に大きな変化が起こったとの解釈がより説得力のあるものに思える。

いずれにせよ、本章にとって最も重要なのは次の点である。少なくとも民政移管からしばらくの間、伝統政治を基盤とする政治家達がブラジル政治の中心をなしていたのは、具体的な政治家と政党の動きを追ったハゴピアンやT・パワーの研究(Hagopian [1992,1996a: esp. Chap.7], Power [2000])からも明らかである。

ブラジルに関しては、サブナショナルなレベルでの伝統政治の重要性が古くから広く認められていたのに対し、アルゼンチン政治研究においては、この要素が重視されてこなかった。例えば、ブラジルに関しては、帝政が終わ

表3 ブラジルにおける政府構成政党（第1期ルーラ政権の途中まで）

内閣	期間	閣僚ポストを持つ政党	右記政党（計）の 下院議席占有率
サルネイⅠ	03/85-02/86	PMDB, PFL, PTB, PDS	93.5
サルネイⅡ	02/86-01/89	PMDB, PFL	69.3
サルネイⅢ	01/89-03/90	PMDB, PFL	53.3
コロールⅠ	03/90-10/90	PMDB, PFL, PRN	50.3
コロールⅡ	10/90-01/92	PFL, PDS, PRN	29.6
コロールⅢ	01/92-04/92	PFL, PDS	26.2
コロールⅣ	04/92-10/92	PFL, PDS, PSDB, PTB, PL	43.7
フランコⅠ	10/92-01/93	PMDB, PFL, PSDB, PTB, PDT, PSB	61.6
フランコⅡ	01/93-05/93	PMDB, PFL, PSDB, PTB, PDT, PSB, PT	67.4
フランコⅢ	05/93-09/93	PMDB, PFL, PSDB, PTB- PSB	53.3
フランコⅣ	09/93-01/94	PMDB, PFL, PTB-PP	58.6
フランコⅤ	01/94-01/95	PMDB, PFL, PSDB-PP	55.3
カルドーズ第1期Ⅰ	01/95-04/96	PSDB, PMDB, PFL, PTB	56.3
カルドーズ第1期Ⅱ	04/96-12/98	PSDB, PMDB, PFL, PTB, PPB, PPS	76.6
カルドーズ第2期Ⅰ	01/99-03/99	PSDB, PMDB, PFL, PTB, PPB, PPS	74.3
カルドーズ第2期Ⅱ	03/99-10/01	PSDB, PMDB, PFL, PPB, PPS	68.2
カルドーズ第2期Ⅲ	10/01-03/02	PSDB, PMDB, PFL, PPB	62.0
カルドーズ第2期Ⅳ	03/02-12/02	PSDB, PMDB, PPB	45.1
ルーラ第1期Ⅰ	01/03-12/03	PT, PSB, PDT, PPS, PCdoB, PV, PL, PTB	49.3
ルーラ第1期Ⅱ	01/04-07/05	PT, PSB, PPS, PCdoB, PV, PL, PTB, PMDB	62.0
ルーラ第1期Ⅲ	06/05-08/05	PT, PSB, PCdoB, PV, PTB, PMDB, PL	59.8
ルーラ第1期Ⅳ	08/05-09/05	PT, PSB, PCdoB, PV, PTB, PMDB, PL	69.0
ルーラ第1期Ⅴ	09/05-04/06	PT, PSB, PCdoB, PV, PTB, PMDB, PP, PRB, PL	69.0

（出所） Santos and Vilarouca [2008: 68] から抜粋。

（注） 本文に登場しなかった大統領は、J・サルネイ（José Sarney）、F・コロール（Fernando Collor de Mello）、I・フランコ（Itamar Franco）である。また、本文と表2で紹介されない政党（性格付けは、PRNについては、Mainwaring et al. [2000]）は次の通り。

PRN：国家再建党（Partido da Reconstrução Nacional）：コロールの大統領選挙出馬のための右派（新自由主義）政党

PcdoB：ブラジル共産党（Partido Comunista do Brasil）

PV：緑の党（Partido Verde）

った1889年からの「旧共和国」において「知事達の政治」が問題とされた時代から、州の自律性が強い²⁶⁾というのが一般的な理解だったのに対し、アルゼンチンでは、近年地方政治の決定的な重要性が重視されるようになるまで、連邦行政府の力が圧倒的で、連邦制は形式のみと言われるほどに集権的であったとされるのが通例だった (Benton [2003: 103])²⁷⁾。

アルゼンチンにおける最大政党である PJ (一般にペロニスモ) が、都市部における労働運動に基盤を置く部分と、周辺的な地域における多階級的で垂直的なネットワークを特徴とする政治に基づく部分とからなる二重性を持っていたことは、早くからコンセンサスのある知見である。そして、周辺的な諸州における PJ の知事達の統治が、かなり非民主主義的なものであることは、ジャーナリズムによる報道もされ、多くのアルゼンチン人には常識であった²⁸⁾。少なからぬ州の政治は、長く知事などの要職にあり続けるボスが存在し、上院議員などの重要な職が家族であるなど、その家族や友人・「子分」に公職が配分されるのを通例とし、その多くの場合に、息子などが次のボスとなるという形で、一族支配の様相を呈してきた²⁹⁾。周辺的地域の州の多くで、一族支配を可能にするような競争の限定が、抑圧も用いて行われてきたとの解釈には、明らかなコンセンサスがある (例えば、Sawers [1996: Chap.9])。しかし、ジャーナリズムが多く「封建的」と呼ぶ政治が州レベルで存在することは広く知られていたが、それが全国政治に果たす役割の大きさは重視されてこなかったというのが筆者の印象である。

少なくとも政治学の分野では、その状況を転換するのに大きく貢献したのは、E・ギブソンの研究だろう。ギブソンは、メネム政権が新自由主義改革を行えた大きな要因を、周辺的地域における PJ を基盤にできたことに求める解釈・分析を発表し (Gibson [1997])、さらに、そうした州が連邦議会で過大代表されていることを重視し、常に PJ がアルゼンチンで最強の政党であった理由を、地方部での強さに求める議論を提出する (共著論文だが、Gibson et al. [2004: 183-184])³⁰⁾。

その解釈は非常に重要である。選挙が公正に行われた場合には PJ が必ず

勝利するのが「鉄の法則」であった（と認識されていた）ことが、アルゼンチンにおいて民主主義が維持されえなかった大きな理由であることは疑いない。同党が（潜在的に）プレドミナント政党であることの基盤が、地方部が過大代表されていることを前提に、そこで非民主主義的な政治に基づいて多数派の得票を獲得できる政治家達の存在にあるとすれば³¹⁾、本節で取り上げている力学が、軍政と立憲体制の交代（クーデタの頻発）の形で民主主義が維持できなかつたというアルゼンチン政治の最大の特徴を、かなりの程度説明することになるからである。民主主義が続くようになった時代についても、同じプレドミナント／ヘゲモニー性が維持され、アルゼンチン政治の不安定性に決定的な役割を果たしていることを—— PJ 以外の大統領は任期を全うできないというアルゼンチン政治の「新しい鉄の法則」の基にあるものとして、すなわち、政治体制レベルの力学でなく、政権レベルの安定性の力学として——述べた研究（Calvo and Murillo [2005]）がある（ただし、ここでは非民主主義的な政治でなく、パトロネイジの効果が基にあるとされる）。

ただし、アルゼンチン周辺部諸州の非民主主義を、ブラジルの伝統政治とパラレルに扱ってよいか、検討の余地がある。PJ（少なくとも、ペロン）は反オリガルキアのはずである（オリガルキアを攻撃するエビータの激的な演説を想起してほしい）。そして、メネムやキルチネルのように、エスニックな出自からも典型的なオリガルキアとは考えにくい指導者がPJの地方ボスに多いことも事実だろう。しかし、PJ全体の基本的な性格としては、地方部同党の、非民主主義的な要素の強い統治を行う政治家達は、オリガルキアの出自・代表であるとする解釈に説得力がある。ヘルバソニーニは、ペロンが新勢力としてのペロニスタ党を築いた際に、それ以前に急進市民同盟の挑戦を受けていた地方の伝統的エリート層が、同党の復活を妨げるために³²⁾ペロンと同盟した（地方のオリガルキアは指導者、組織、得票を提供する代わりに、その州のペロニスタ党の指導者として認定される）という理解が広く行われており、歴史学的にも実証された事例も多いことを紹介し、非民主主義的な支配を行う州政府がPJのものであることが多い（それは計量分析で裏付け

られる) 3つの理由の一つとしている (Gervasoni [2006: 10-11, 20, 24-25])³³。

こうして、2国では伝統政治の重要性は別の形で発揮されてきた。同じ周辺の州の過大代表が、ブラジルでは政策転換を阻害する方向に働くのに対し、アルゼンチンでは、PJの大統領の議会での多数派をもたらしたため、政策転換を大きく助けた(少なくとも新自由主義的改革についてはこの対照が明白だった)との対比(Gibson [2004: 23])は、両国の相違をよく示す。周辺の諸州の議会での過大代表と伝統政治の組み合わせは、ブラジルでは、議会が断片化し、それが(妥協して連合を形成しなければ)大統領の政策遂行を困難にする状況を作る。同じ要因が、アルゼンチンでは、PJの大統領の場合は、伝統政治が大統領に議会での多数派を与え、行政府主導の政策運営を可能にする。議会主導で、伝統政治に必要なパトロネイジの源泉の配分がなされるブラジルに対し、アルゼンチンでは、PJの大統領は、議会での基盤の拡大のため、PJ(とそれと連携する地域政党)の州知事にパトロネイジ資源を寛容に与えつつ³⁴、反対勢力や民主主義的手続きを軽視した統治を行う。両国ともに、そのように分配されたパトロネイジ資源が、伝統政治の維持に用いられる。両国で異なる力学により、政党システムの性格と州レベルの政治支配の重要性とが、循環して維持されてきた。それぞれの力学が、ブラジルでは政策の停滞という弊害が特徴的であり³⁵、アルゼンチンの民主主義が存在する時期については、権力集中と振幅の大きな政策の交代という弊害が生まれやすいことを説明する。両国政治の主要な問題点が、それぞれの形で、周辺の地域における伝統政治の温存と結び付いてきた³⁶。

以上の研究動向の整理が正しければ、特に周辺の諸州における伝統政治が、全く異なる形での政党政治を媒介にして、それぞれの国で最も大きな政治的問題と思われるもの主要な要因になってきた。両国でその要因がいかに変容した(または、しなかった)のかの考察が、以下のテーマである。

第4節 ブラジルにおける政党政治・「伝統政治」の変容と民主主義

まだ確定的なことが言える期間が経過していないが、ブラジルにおける伝統政治が大きく衰退したことを示す兆候が、2006年選挙⁶⁷⁾で明白に現れた。長く伝統的政治エリートの家族に支配されていた2つの州で、ルーラが圧倒的多数の得票を獲得し、その一つでは、知事選挙においてそうしたクランの候補を労働者党の候補が破った。伝統政治が強かった北部・北東部の他の4州でも知事選挙でも、同党候補が勝利した(Hunter and Power [2007: 20])。そうした変化を生んだと解釈されてきた複数の時点(要因)に関する研究動向を整理することで、変容の性格・原因について考察したい。

前段落で述べた結果から予想されるが、ブラジルの貧しい州における政党支持の変化については、ルーラ政権の政策を重視する解釈が有力である。そうした解釈の特徴は、労働者党(少なくともかつての労働者党)が生んできた変化の方向とは異なるものとして、ルーラ政権の政策が決定的に重要だったとすることである。すなわち、かつての労働者党が進めていたブラジル政治の変容(先にまとめた通説が述べていたような特徴の解消)を逆転させた結果であるとし、極端に言えば、伝統的なクライエンテリズムに基づく政治の担い手が従来の政党から「ルーラの労働者党」に代わっただけである、との解釈にもなりうる議論である。

そうした解釈の代表は、米国の政治学者W・ハンターによる、1990年代後半に始まり、ルーラが政権に就いて以来急速になった変化が、労働者党を全く異なる政党に変えてしまったとの議論である。同党は、政権に就くために、イデオロギーを無視して右派政党と連合し⁶⁸⁾、買収などを行うなど、ブラジル旧来の政党と同種の党となったとされる。本章の視角から特に重要なことだが、ハンターは、労働者党の元来の主張からは大きく転換し、改革でなく、パトロネイジによって支持を獲得することでも、ルーラ政権はブラジ

ルの他の政党と同種になったことを重視する (Hunter [2008: 28, 31])。クライエンテリズム批判を主張の一つの柱としていた労働者党が「政治的スペクトルを越えて諸政党と組み, PRの専門家を雇い, パトロネイジの分配さえるなど, ブラジルの諸包括政党の政治的戦術を採用し始めた」(強調は引用者)との厳しい批判的解釈がなされる。同研究者による別論考 (Hunter [2007]) のタイトルが, ブラジル政党としての「ノーマル化」が労働者党に起こったと述べるように, 同党が, 先記したような従来のブラジル政治のゲームのルール (同党が変容させるはずだったもの) に従うようになったとの議論だが, そこでルーラのパトロネイジ政治が特に強い批判の対象になるのは, それがブラジル政治の最大の悪弊 (の一つ) だとされてきたことから自然であろう。

そして, そのような手法こそが, 北東部などでのルーラと労働者党が得票を拡大した理由であるとされる。2006年選挙に関するハンターらの論文 (Hunter and Power [2007]) は, 第1次ルーラ政権における経済状況が北部・北東部州に多い貧しい人々を利する (南部に多い中間層の所得を上昇させない一方で) ものであったこと, そして, 社会政策, 特にルーラ政権の対貧困政策の中心となった「ボルサ・ファミリア」で現金支給を得た貧しい人々が北部・北東部に多かったことによって, これらの州におけるルーラへの投票の大幅な増大を説明する。特に社会政策の効果が決定的であったとされ, 貧しい諸州でのルーラへの支持の拡大が, そうした州での伝統的な手法であった「クライエンテリズム的な支持獲得」と変わらないと読める表現さえなされている (Hunter and Power [2007: 9-10])。

しかし, それは伝統政治を特徴づけるクライエンテリズムとは大きく異なった政策である。ボルサ・ファミリアは, 貧困家庭に対して, 子供の通学や保健所での健康チェックなどを条件にして一定額の現金を支給する政策である。すなわちそれは, 支持・忠誠を条件に恩恵が与えられるクライエンテリズムでないのみならず, 特定の地域に住んでいることを条件に恩恵が与えられる「ポークバレル政治」ですらなく, 低所得層というある社会的特徴の集

合の人々が恩恵を受ける「プログラムとしての再分配政治」(programmatic redistributive politics)である³⁹。それが実際にも、そのように実施されていることを示すデータもある。ある研究者が計算した結果、ボルサ・ファミリアを受給された家族をブラジルの5つの地域で分けた比率は、家計収入から計算される理想値とほぼ一致しており、この政策が普遍的基準で行われていることを示している。2006年選挙でルーラが大幅に得票を増加し、その勝利に決定的な役割を果たした北東部が49%を占めるが、理想値は48%であり、ルーラの伝統的な支持基盤であった南東部はともに27%であり、これらの地域が大きな割合を占めているのは、そこに貧困な家庭が多いからである(Fenwick [2009: 123-124])。ボルサ・ファミリアが州政府を迂回し、連邦政府の政策を基礎自治体が履行する性格を持っていたことを明らかにした(そして、支給が適切に行われ、貧困を実際に減らしているという意味での成功は、それゆえであるとする)研究は、「州に基盤を置くパワーブローカー達」が給付を自分のおかげであると主張できない性格の政策であることを強調する(Fenwick [2009: esp. 114, 117, 124-125])。皮肉にも、先記のハンターらの論文自体が、この点で極めて明確である。「特出すべきこととして、ボルサ・ファミリアを受け取るには、政治的ブローカーや媒介者を必要としない。この重要な点において、それは伝統的なクライエントリズムと異なっている。政府に反対する投票をすることにペナルティーがない点でも、クライアントがパトロネイジを受け取る条件として政治的忠誠を示すことが条件となる伝統的なパトロン＝クライアント関係と異なっている」と指摘する(Hunter and Power [2007: 18])。伝統的政治エリートが支配的で、州政府を握っていた諸州では、パトロネイジが支持獲得の重要な手段であったが、その州知事を飛び越えた分配をルーラ連邦政権が行ったことで、彼らのマシンが機能しにくくなったと解釈できよう⁴⁰。

さらに、周辺の地域でルーラへの投票が拡大した主要な要因がボルサ・ファミリアだったのかは明らかでない。ハンターらの論文は、選挙前に行われた意識調査の結果をその証左とするが、別の研究(Fenwick[2009: 120-122])

は、選挙後の意識調査のデータから、ルーラに投票したとする人が多いのが、ボルサ・ファミリアの支給基準を満たす層よりは高所得の、ルーラ政権による最低賃金の上昇が利した所得水準の階層だったとしている。様々な政策による所得再分配全体が、貧しい層のルーラへの支持の基盤にあると考えるべきであろう。

ルーラ政権による再分配政策と表裏一体なのが、州知事達からのパトロネイジ資源の剥奪である。後者は、基本的にカルドゾによる改革の結果である。従来、民政移管に伴う財政上の地方分権に加え、連邦政府による州財政赤字の肩代わりが寛大になされ、さらに州政府の有する銀行（首都連邦区も含めた27州のうちの25が、少なくとも1行を有していた）から、しばしば返却を怠るローンを得る手段も用いることで、州知事によるばらまき政策が可能になっていた。カルドゾは諸改革によって、その状況を一変させた（Samuels [2003: esp. 547-557]）。まず、地方政府への移転が憲法上義務付けられている支出枠から20%を免除する「緊急社会基金」を創設し、それを重要な梃子としてインフレ収束が達成されると、放漫財政による債務をインフレでカバーすることが不可能になる中で、諸改革によってさらに州政府の財政を縛っていった。債務返済を歳入の60%以下にしない場合連邦政府からの基金を失わせる法を制定し、州政府債務の更新に州債発行の制限を条件にするなどの措置を採り、2000年には、サブナショナル政府の債務に厳しい限界を課し、サブナショナル政府に歳入・歳出を公開することを義務付けるなどの規定を持つ「財政責任法」を制定する。また、州銀行に連邦政府が介入して民営化し、州知事のコントロールを失わせた。連邦政府が基礎自治体を実施機関として直接に分配する（州知事を回避する）ボルサ・ファミリアの成功は、以上のような、州政府の予算を拘束する方向への改革を前提とする（Fenwick [2009: 117]）。さらに、ボルサ・ファミリア自体が、「ボルサ・エスコラ」を中心にカルドゾ政権が行っていた政策の発展的継承であった⁴¹⁾。すなわち、プログラムとしての再分配政策を重要な支持獲得手段にする手法はカルドゾ政権によって開始されていた⁴²⁾。こうして、伝統政治を弱めた要因（時点）

として、蔵相期も含めてのカルドーゾの時代、特にその新自由主義改革が重要であったとの解釈が提出しうる。

カルドーゾの政策を重視するとすれば、旧来のボス政治家が中心をなしているはずの諸政党（特に、伝統的な政治手法を取る政治家が多く集まる右派諸政党やブラジル民主運動党⁴³）が、彼が改革を進めるのを妨害できなかった理由が大きな謎となる。クライエンテリズムの基になる資源を奪う改革を容認・支持したのは、前節で述べた従来からのブラジル政治の力学（循環）からは理解できない⁴⁴。特に、北東部の伝統的政治家を多く擁し、クライエンテリズムの政治を行う典型的な政党とされてきた自由戦線党（Partido da Frente Liberal: PFL）は、カルドーゾ政権の連合に加わって、その政策遂行を助けた。

このパズルへの一つの答は、ラテンアメリカ一般に指摘される、それ以前の危機が大きいくほど、新自由主義改革が進むという傾向によって与えられよう。各国の新自由主義改革を比較した研究の中でウェイランドは、ブラジルについて、パトロネイジ資源を奪われることへの抵抗から、多くの政治家が改革を妨げようとしたことを指摘した上で、カルドーゾがその抵抗を排せたのは、その時点で起きた経済危機によるとの解釈を提出している（Weyland [2002: Chap.8, esp. 241-242]）。

しかし、危機の重要性とともに、別の仮説も提出できよう。新自由主義改革との関係も重視した、ブラジルの保守諸政党に関する優れた概説的分析は、次の諸点を明らかにしている（Mainwaring et al. [2000: 193, 195, 208-211, 214-216]）。特に労働者党と PSDB（注43に紹介したカルドーゾの属する党）の得票拡大によって、保守諸政党は、強力であった北東部においても、支持を減らしていた。新自由主義改革が国民の広い支持を集めるようになる中で、守旧的で、軍政の過去と結び付いた勢力とのイメージが強かった保守諸政党にとって、近代的な政治勢力であることをアピールする（さらに、社会主義を説く左派政党の方を守旧の党として批判できる）ためにも、新自由主義を唱えることは重要な役割を果たした。並行して、各党に新自由主義を唱える「近代的」でイデオロギー的な右派政治家が増していった（それに対応して、支持

基盤も、農村部の低所得で教育水準の低い層と大都市部の教育水準が高く高所得の層とからなる二元性を持つ)。ここからは、労働者党の支持拡大の中で、クライエンテリズム的な支持獲得をある程度犠牲にしても、新しいタイプの支持獲得を試みざるをえなかった、という仮説が提出できる。また、カルドーズによる改革を分析した研究は、先記の緊急社会基金をPFLが支持した理由として、経済を安定化できなければ、1994年大統領選挙で労働者党のルーラが勝利する可能性が大きく高まるとの認識の存在を挙げている (Samuels [2003: 552])。なお、保守諸党に関する先記研究は、新自由主義というイデオロギーを重視する政党とクライエンテリズムを特徴とする政治家による政党に分かれるのではなく、右派各党に新自由主義者が混在することを、ブラジル政党システムの重要な特徴の一つに数える (Mainwaring et al. [2000: 192-193])。それが、古いタイプの政治家による抵抗の結集を妨げた (各党で、新自由主義イデオロギーを重視する「新しい右派」の発言力が、支持減少に苦しむ党の中で大きくなるという過程も介して) との仮説も提出できるかもしれない。とすれば、ブラジル政党の弱さは、皮肉にも改革を可能にする一つの要素になったことになろう。いずれにせよ、カルドーズ政権による改革は、政党政治の変容の中で理解されるべきであろう。

以上の諸点を念頭におけば、おそらく最も重要なのは、伝統政治を特徴とする政治家への支持が減退している長期的傾向であろう。先にも参照した、ブラジルの州レベルの非民主主義を体系的に扱った研究は、重要な知見を示している。同論文は、民政移管直前に州知事が選挙選出となった1982年から2002年までにつき、知事選・州議会選での得票率のマージン、決選投票になった知事選の数、州知事選投票と州議会議席での有効政党数、知事を再選した選挙の数、知事の政党の州議会での議席率という指標などによって、27州 (首都連邦区も含め) を、競争的である程度によって3分する。そして、中間的な競争性を持つ8州につき、それが競争的である (競争的にした) 要因として、3州で州知事選に勝利し、2州で勝利連合に加わっている労働者党の役割 (それまで支配的だった保守的な名望家のマシンに対する挑戦) が他を圧

して重要であるとされる (Montero [2007: 17])。同研究は2002年選挙までを扱うが、その後の2006年選挙で、競争性の低いグループの11州のうち、2州(バイーアとセルジッペ)で、労働者党候補が州知事選に勝利した。

カルドーゾの時代も含めて、伝統政治を行う指導者達から票を奪うのに労働者党の役割が重要だったと考えるべきであろう(表1も参照のこと)。そこからは、ルーラ政権期に同党の得票が拡大して伝統政治が弱まっているのも、政権による分配(再分配)政策に加え、労働者党自体の働きによる勢力増大を通してという側面も大きいだろうことも示唆される。労働者党の拡大が大きな要因となった、伝統的政治手法を特徴とする政治家達への支持の減少という長期的な現象が、カルドーゾやルーラ政権による政策革新、それに基づく支持拡大(そして、それによる伝統的政治家への支持のさらなる減少)の基盤にあったと考えられよう。少なくとも、ブラジル政治の大きな変容が起こっており、労働者党の拡大がそうした大きな変化の最大の要因ではないとしても、変容の最も明示的な現れの一つであることは確かだろう。

労働者党の拡大が伝統政治を弱めるのに重要な役割を果たしたという解釈が正しいとすれば、それが具体的にどのように起こったかを窺える研究がある。いくつかの自治体を分析した論文(Nylen [1997])は、労働者党による伝統政治の打破に、従来の政治を変革しようとした集団が形成されて活動を始めた後に、それが労働者党を選んで加わった場合と、労働者党の人々が古い政治を変える動きを始めた場合があったことを明らかにしている。

前節で述べたことが正しければ、サブナショナル・レベルでの伝統政治の弱まりは、イデオロギーの重要性や党規律などの点での諸政党の性格の変容、その結果としての議会政治の変容と並行しているはずである。そして、それを示す研究が蓄積されてきている。議員の行動などの議会政治、それと連邦制や州知事の役割との関係などについては、ブラジル政治研究の中でも特に進展が顕著な分野であろう。そうした中で、時系列による変化を発見しない研究も多い。しかし、諸指標に示される党規律の強化、議員に行ったサーベ

イで政党を重視すると考えられる回答が増大してきたこと⁴⁵⁾などを示す研究を紹介して、政党がパトロネイジに基づく選挙を行う政治家からなる性格を弱め、政党綱領が重要になるという大きな変化があったとするハゴピアンらの解釈 (Hagopian et al. [2009]) の方が、説得力が大きいであろう。

既成政党の性格、議会政治のあり方という側面での変容においても、重視されている要因 (時点) は、カルドーズによる改革である。ハゴピアンらの論文は、先記の変化の原因を、その改革がパトロネイジの政治を困難にし、政治家が支持者達の個別利益に訴えて個人ベースで支持を獲得するのでなく、綱領を基礎とした政党ラベルで勝負するようになったことに帰す。一時点の議員達への意識調査の分析結果が、その仮説のコロラリー群に合致することで、この解釈がどの程度裏付けられたのかは筆者には判断できないが、カルドーズの改革が重要だとしても、先述のように、改革を伝統的諸政党が受け入れた (支持した) 前提に、労働者党による伝統政治への挑戦があったと考えられ、ここでも、それ以前の同党の勃興が重要であったことも確かだろう。

さらに、ハゴピアンらの解釈が正しいとしても、それは労働者党の伸張が他の諸政党が変容する直接的要因であったとの解釈と両立しうる。労働者党が政党システムに参入する、すなわち、イデオロギー性が強く、党規律が強い同党が強力になっていくことで、他の諸政党に同じ方向への変容を促すことになり、ブラジル政党システムの制度化が進んだという解釈は、広くなされてきた⁴⁶⁾。

以上の解釈が正しければ、労働者党の得票拡大と伝統政治の弱まりを中核的な要素とする変化が、ブラジルにおいて国民の多数派の支持を受ける政権政党が志向する政策——それも、少なくともルーラ政権期には、社会経済的不平等を改善する方向の政策 (近田 [2008: esp. 226-228] など) ——が履行されるようになったこと、すなわち、様々な側面での民主主義の質の向上の基盤にある。なお、2009年になってのち、最高選挙裁判所によって2人の州知事が解任され、別の5知事も審理中 (2009年3月末段階) である (それ以前、

そうした措置を取りやすくする法律が成立した1999年からこうした解任は2件のみだった)。職を失った1人はPSDBの知事であるが、基本的には伝統政治を特徴とする政治家達に対するもので、多くが、パトロネイジの分配の形で、公職を選挙のために利用したことによる⁴⁷⁾。そうした攻勢が、どの程度ルーラ政権や労働者党の方針に関連するのかを判断することは筆者にはできないが、ここで述べた変容の延長線上にあることは明らかに思える。ブラジルでは大きな変容が起こっているのだろう。

第5節 アルゼンチンにおける政党政治・「伝統政治」の変容と民主主義

アルゼンチンにおける政治の推移を簡単に追ったのみで、そこでの変容が、ブラジルとは全く異なる方向のものであることが看取できる。伝統政治の担い手であると考えられる政治家達が連邦政府の大統領となっているからである。

第1に、本章のテーマから重要なアルゼンチンの動向は、周辺諸州における伝統政治の継続である。伝統政治がかつてのように安泰でなくなっているのも重要な事実である。ファレス (Juárez) 一族の支配していたサンティアゴ・デル・エステーロ州では、州エリートと治安機関が関与した殺人事件のもみ消しへの反対が州を越えた社会運動へと盛り上がった結果、N・キルチネル連邦政権による「介入」⁴⁸⁾により、2004年に一族支配が覆された。しかし、周辺の地域の多くの州における伝統政治の継続も広く指摘されている。一族支配の特徴が強かったカタマルカ州で、先記と類似の反対運動の強化(殺人事件のもみ消しが全国的な抗議運動を引き起こした)によって1991年に州知事選挙で敗北した政治家が、下院議員、のちに上院議員には選出され、キルチネル派の一翼を担っていることも、それをよく示す。アルゼンチン各

州の非民主主義政治全般についての、筆者の知る限り唯一の体系的な分析であるヘルバソーニの研究は、「アルゼンチンの州の中には他に比べてより民主主義的なものもあるが、ほとんど [の州——引用者注] は1983年以来あまり変わっていない」と述べている (Gervasoni [2006: 18])⁴⁹。各州政治の実情と議席占有率などのデータから篠崎 [2008] は、サン・ルイス州におけるロドリゲス・サア一族、サルタ州におけるロメロ (Romero) 一族の「王朝」が続いていることを明らかにしている。

第2に、PJが支配的である州の多くで伝統支配がかなり継続する中で、全国政治でのその比重が変わったのが、アルゼンチンにおける変容の重要な側面だろう。大都市部と周辺的な地域で大きく性格を異にしていたPJであるが、少なくとも建前としてはペロニスモの政治運動の全てが従うことになっていたファン・ペロンがそれを束ねていた。ペロンの死後、混乱と極度に抑圧的な軍政を経て⁵⁰、1983年民政移管によって政党政治が復活した時にPJを主導したのはペロニスモの労働運動であった。しかし、軍政による労働運動の弾圧、その頃からの新自由主義的政策の断続的な展開、世界情勢などにより、労働運動は弱まり、その後PJは各州の州知事となるような州レベルの指導者達の合従連衡を基盤とする政党へと変容した。先に紹介したメネムもネストル・キルチネルも、また2003年大統領選で2人と争ったアドルフォ・ロドリゲス・サア (Adolfo Rodríguez Saá)⁵¹も、典型的な周辺州PJの政治ボスであったことが、同党の性格をよく示そう。PJが「地方ボス」(州レベルで権力を集中するPJ政治家のことを篠崎はこう呼ぶ)の合従連衡を特徴とする政党へと変容する過程を詳細に分析したのは篠崎英樹の一連の研究 (篠崎 [2007, 2008]) である。篠崎は、従来は労働運動に基づく政治を特徴としたブエノスアイレス州PJの指導者で、先述危機の中で大統領になった指導者も地方ボスに含めており、PJの中核をなす指導者達は同じような性格を持っていると解釈される。政治の様々な側面において独断専行的で委任民主主義的な特徴を示したメネム政権⁵²が、他の地方ボスとの関係においては、政策面などでの妥協による多数派工作を特徴としたことも、ボス達の合従連衡を

特徴とする PJ の性格の現れである。

第3に、PJ の中核に位置するようになった地方ボス達が、アルゼンチン政治全体の中心を担うようになったのは、PJ 以外の政党が弱体化した結果である。すなわち、各州のボス政治家達が続けて大統領となる状況を作ったのは、アルゼンチンにおける二重の変化であった。勝利する可能性のある候補者を出せる政党が一つとなり、その政党が地方ボスの連合体を中核とするようになったのである。

興味深いことに、そうした中で重要な地位に昇った地方ボス達は、特に非民主主義的な政治を特徴とする州の知事であった政治家である。4 指標⁵³を合体させたヘルバソーニの非競争性の指標において、アルゼンチンでも最も非民主主義的な政治体制を持つ5州は、ラ・リオハ、サン・ルイス、サンティアゴ・デル・エステーロ、フォルモーサ、サンタ・クルスであるが (Gervasoni [2006: 10])、先記のメネムはラ・リオハ、N・キルチネルはサンタ・クルス、ロドリゲス・サアはサン・ルイスの州知事だった。非民主主義的な州出身であることがPJでの権力資源になるのかは確認できないが、ある時期以後のPJの性格を象徴する事実であろう。メネム政権が委任民主主義の典型とされ、キルチネル夫妻の政権も同様の性格を持っているとされるのは、彼らが周辺州における伝統政治を特徴とするボスであることから当然とも言えよう。そして、伝統政治の特徴を強く残す指導者が国の大統領として統治する状況は、1980年代後半以来の同国政治の変容の性格を最もよく示すと考えられよう。政治史・政治哲学の研究者でアルゼンチンを代表する知識人でもあるN・ボターナ (Botana [2006]) によるアルゼンチン政治の現状の理解は、基本的に本章で示したものと共通する。地方の一部の州での知事に権力の集中する政治を指摘し、その代表にメネムとN・キルチネルを挙げ、連邦政府における行政府への権力集中を、彼が詳細に研究した19世紀後半から20世紀初頭の非民主主義的な政治と共通する特徴を持つものであるとする。

以上からは、PJに伝統政治の特徴が強く残り（あるいは、ある時期から強化された可能性もあり）、それがアルゼンチンにおける民主主義の質が低いこ

との大きな要因になっているとの解釈が提出できる。

なお、大都市部におけるPJの変容を、伝統政治の観点からどう解釈すべきかは明確でない。レヴィツキーが分析したクライエンテリズム強化⁶⁴の有無を、意識調査結果の世代間の違いを分析することで間接的に検証した研究は、その変化を確認している。特にPJ支持の低所得層に強い傾向として、若い世代の方が、失業した際に政党政治家に頼り、選挙の際に「贈り物」を受け取り、「贈り物」によって投票を決定する傾向が強い（Brusco et al. [2004: 73-75]）。しかし、この研究は、クライエンテリズム的な手法が重要になったのを、人々のペロニスモへの同一化が弱まった、その意味ではより自律的な投票者となった結果であると考えており、大都市部における組織政治の中心であったペロニスタ労働運動において非民主主義的な政治が強かった（との解釈が通説的である）ことを考え合わせると特に、非民主主義的なボス政治が、PJのクライエンテリズム政党化によって強化されたと解釈できない可能性も高い。ただし、J・アウジェーロの一連のエスノグラフィ的な研究（Auyero [2000, 2007]）は、大都市部でのPJのクライエンテリズムも人的なネットワーク（そこではペロニスタとしてのアイデンティティーも重要な役割を果たす）を基盤にしており（この点は、Brusco et al. [2004]も指摘）、さらに、警察の一部ともつながりを持ち、反対派への暴力にも使われうるネットワークも存在していることを示している。

まとめ

以上の考察が正しければ、1990年代以後の両国は、伝統政治の側面において、大きく異なる変容を経験したことになりそうである。ブラジルにおいては、政治を変革することを掲げ、そのために強く抑圧的であった長期軍政を経てかなりの程度維持されてきた伝統政治が、決定的な変化を迎えつつあ

るかもしれない。アルゼンチンでは、伝統政治が弱まった変化の側面もあるが、全国レベルの政治のあり方を決める局面においては、伝統政治的特徴がさらに前面に出るようになった変化が観察できる。

もちろん、両国の民主主義の質と安定度の違いを、全てこの点での差違に帰すことができないのは明らかである。しかし、提出されてきた研究を筆者なりに比較検討しつつ統合した結果は、伝統政治に関わる状況が両国の政治の少なからぬ部分を説明することを示唆している。なお、アルゼンチンにおいてPJの大統領がより委任民主主義的であり、政策上の突発性と攻撃性を特徴とすることの説明として、制度的枠組と多党制（どの党も議会内多数派となれない）から議会での妥協を必要とするブラジルとは異なり、PJが絶対多数を取っていることがよく挙げられてきた。その点の重要性は明らかだろうが、本章ではその基盤の一端にも、やはり伝統政治があることを示したつもりである。

クライエンテリズムをめぐる変容に関しては、都市の政治に焦点を当てた考察が主であるように思われる⁶³が、ラテンアメリカ諸国において長く伝統的支配層が重要であった歴史からも、伝統政治の継続とそこからの脱却、また、その脱却の様態によって、政治（史）を分析することには重要な意味があるものと思われる。本章の現状分析が、そうした「政治発展」の長いコンテキストの解釈にも少しでも寄与できれば、筆者には望外の幸せとなる。

<謝辞>

本章を書くにあたり、篠崎英樹氏（神戸大学大学院）に、文献の紹介などの点でご教示を受け、本章全体の草稿を読んでのコメントをいただいた。ブラジルの状況については、近田亮平氏（アジア経済研究所）から、様々な情報を提供していただき、ご教示を得た。また、本章と大きく重なる内容であった2009年度日本比較政治学会研究大会の報告（6月27日）に対するコメント——討論者はもちろん、もう一人の報告者、司会者、フロアの質問者からも——によって最終稿直前での改善が可能となった。本書の基盤となった

研究会のメンバーの方々に対してと同様、これらの皆さんに心からお礼申し上げたい。

[注] _____

- (1) また、多くの国では民主主義への移行が新自由主義改革に先だったが、チリやメキシコについては、このシークエンスさえも異なっていた。
- (2) 一方で「既成政党システムの溶解」(宇佐見 [2008: 152]) が生じたと同時に、他の政党が壊滅的なものに対し、かつてからの有力政党の一つのみは勢力を維持している点で、アルゼンチンは、それまでの政党システムが全面的に崩壊した諸国と、政党システムが安定している諸国との中間にあると言える (Levitsky and Murillo [2005: 42])。
- (3) 特に民主主義の質については、絶対的なレベルの上下は別にして、従来の状態から大きく向上したブラジルと、改善の見られないアルゼンチンという差違が重要だろう。
- (4) なお、ラテンアメリカ民主主義における伝統的支配層のパワーというテーマは、一時期はある程度の関心を集めたが、民主主義が維持される傾向が明白になり、その質が関心の中心になるにつれてあまり注目されなくなったというのが筆者の印象である。ブラジルとアルゼンチンの政治に関する研究動向から、その領域の重要性を再び強調することも本章の狙いとなる。
- (5) 一般的な言葉でもあり、本来はカッコで囲み続けるべきだろうが、煩雑さを避けるため、以下ではカッコを省略する。
- (6) なお、伝統的支配層がある程度以上強力であるにもかかわらず、民主主義の枠組の中でそのパワーが発揮できない場合、民主主義が維持されなくなったのがラテンアメリカ政治の基本的特徴の一つであり (ハゴピアンも認め、その議論の前提になってさえている)、パワー一般と、民主主義の枠組の中で——すなわち、政党を通して——そのパワーを発揮できる程度との関係のあり方は、重要な変数であるはずである。ハゴピアンは、2つのパワーの相違に言及はしているが、実際には両者を同一と考えて議論を展開しているように思われる。議論から判断すると、その同一視は、何よりも、伝統的エリートのパワーが強ければ、クライエンテリズムに基づく大衆基盤を用いて自らの利益を代表するような政党からなる政党システムを形成できる——その特徴ゆえ、有権者の政党へのアタッチメントは弱く、政党はイデオロギー・政策に基づかないなど、一般に政党は弱体となるが——という命題 (言うまでもなく、ブラジルの状況が——エクアドル、グアテマラとともに——典型と想定されている) をハゴピアンが採っている (Hagopian [1996b: 81-82]) ためであろう。他にも、保守的な政治勢力に有利なような合意によって民主主

義への移行がなされ、民主主義が維持されているため、伝統的支配層のパワーが政党を通して表現されやすい（されている）こと、自律性の高い軍による軍政を経験して、伝統的支配層などの豊かな人々が、非民主主義が必ずしも信用できないのを学んだこと、クーデタという選択肢の正統性が大きく失われたことなども、この同一視を正当化すると考えているようである。しかし、この同一視は、伝統的な農村構造がなく、伝統的支配層が農民層を基盤とした強力な保守党を築くことができなかったため、両者の齟齬が大きいというのが通説的な理解であったアルゼンチンのパンパ地域については、大きな問題を含む。これは本章注33で述べることと関連する重要な点だが、本格的な考察は別章に回したい。

- (7) それぞれが別の研究で述べられるとはいえ、密接に関連するテーマであるため、そう述べてもよからう。
- (8) それが、ハゴピアンがラテンアメリカ一般について、「伝統的エリート達の権力基盤はローカルおよび地域の政治にあるが、彼らは全国レベルの政治への広汎なアクセスを享受している」と表現している (Hagopian [1996b: 68]) ことの——少なくとも、本章で扱う2国における——具体的なあり方である、と考えられよう。
- (9) 例えば、優れたブラジル政治の概説書を参照のこと (Montero [2005: 29])。ハゴピアンの研究 (Hagopian [1996a]) 自体が、都市化のレベルの高い州を事例としている。
- (10) これを指標に用いる統治の抑圧性と、非競争的である程度（詳しくは後記）とにより、権威主義的である程度を判定している。
- (11) そうした議論の代表は、ブラジルを主な研究対象とするアヴリッツァーによるものだろう（特に、Avritzer [2002]）。そこでは、「第2の波」で成立した民主主義と異なり、「第3の波」で成立した民主主義はより参加的であるという議論も展開されている。
- (12) そうした解釈を代表する議論を展開するのは、レヴィツキーであろう（ここで紹介した議論を代表する文献は、Levitsky [2007]）。
- (13) レヴィツキーの議論に加え、Brusco et al. [2004: 66-67] など。
- (14) 共同市場を形成した隣国ブラジルの通貨切り下げでの打撃も大きかった。
- (15) ただし、ラテンアメリカの中でも、他に同様に歪みの大きい国もある。
- (16) なお、このテーマは「連邦制」のテーマの中で研究が進んできたが、連邦制を採る西半球4カ国を比較したギブソンらの研究で得られた、少なくとも補助金などの配分の歪みに関しては、下院での過大代表の決定力の方が上院のそれよりも大きいとの知見 (Gibson et al. [2004: 181]) は、本章で扱うテーマがラテンアメリカ一般にも適用できる可能性が大きいことを示唆している。
- (17) 特にブラジル政治についての多くの文献の用法に従い、本章では「パトロ

ネイジ」を職の分配という狭義でなく、物質的な分配なども含めた意味に用いる。

- (18) 以下は、他に引用する文献に加え、かつての通説的な解釈の代表とされる著作 (Ames [2001], Lamounier [2003], Mainwaring [1995] など) の議論から筆者なりにまとめたものである。
- (19) 新自由主義改革の諸要素など重要な政策については、両院で、5分の3以上の多数で、2度可決される手続きを要する憲法改正が必要となるという制度的特徴が、困難をさらに大きいものにしていく。
- (20) 本章では詳述できない要素も含め、後記の論争の一部にも触れ、従来の通説よりのブラジル議会・政党政治のあり方を要領よくまとめたモンテロの著作 (Montero [2005: esp. 51-67]) では、パトロネイジの創出と消費が自己完結的に循環すると表現されている (p. 61)。
- (21) そうした制度的特徴ゆえに、ブラジルにおいては、民主主義下でも平等化を進める改革が行われず、社会経済的不平等が維持されると解釈するのが、K・ウェイランドの研究 (Weyland [1996]) である。
- (22) ブラジル人政治学者による研究動向論文 (Amorim Neto [2002: 131]) での2002年段階での認識によれば、米国人政治学者の間では、従来の通説がまだ支配的であるのに対し、ブラジルの政治学者コミュニティでは、修正解釈の方が常識的理解になっている。
- (23) なお、ブラジル政治の解釈を2つの立場に整理するのではなく、自分達が唱える第3の立場の存在を述べる重要な議論が存在する (Armijo et al. [2006])。この立場も、政党指導者が議員達の行動をコントロールできる政党によって議会が構成されることを前提にして、それゆえ大統領との継続的な交渉と妥協で政策が進んでいくという解釈であり、議会を中心的な場とする政策決定において、大統領と政党指導者へと集権化が起こっているとすると、修正解釈と共通する。
- (24) 党規律の高さについては様々な解釈がある (Montero [2005: 59-60, 66])。また、論理的には、党籍変更が多ければ、党規律の高さと「通説」的解釈は両立するが、党籍変更の多さはルーラ政権まで継続している (Santos and Vilarouca [2008: 77])。
- (25) なお、同論文は、政党システムの点での通説への修正解釈 (例外的な時期を除いては、断片化していないとする) も扱い、修正解釈寄りの立場から様々な局面に関する分析を整理・統合し、一つのブラジル政治像を提出している。
- (26) ただし、コーポラティズム的な独裁体制や先記軍政の時期に中央集権化が試みられた。
- (27) なお、アルゼンチンにおける中央地方関係を追究してきた研究者 (Eaton [2005: 88-89]) は、連邦政府に権力が集中していたのが、民主主義が続くよ

うになる1983年から一転したとするが、以下で紹介するように、近年は、州レベルの政治の役割がかつてから重要であったとの解釈も強くなっているようである。

- (28) 他の政党の政治家が同様の特徴を持つ統治を行う州もあるが、そうした政治は、多くがPJの州知事によるものである。
- (29) 典型的な非民主主義的な統治が行われていた州の政治の状況は、そこからの民主化を扱ったギブソン論文（Gibson [2005: 102, 121-128]）からも窺うことができる。
- (30) ベロンは自分と自分の政党の支持基盤の強化のため、意図的に内陸部を過大代表される制度改革を行った（Snyder and Samuels [2004: 141-144]）。なお、その後の諸制度改革も、大きな傾向としては、代表の歪みが拡大していく形で行われた。
- (31) 重要なのは、E・カブレーラ（Cabrera [1996: 88-89]）もアルゼンチンにおける選挙制度の歪みとして重視するように、1994年の憲法改正以後、全国を単位とする直接選挙となるまで、大統領選挙は州を単位とする選挙人団（それをその選挙区での投票結果によって配分する）を選出する間接選挙によっており、各選挙人団の数は上下院議員の合計の2倍であったため、議会選挙における代表の歪みが大統領選挙にも反映されていたことである。1973年の民政移管の際に軍政が直接選挙による大統領選挙を行ったように、それに従わないことは可能であるが、憲法に従う限り、大統領選挙においても、周辺の州が過大代表されるようなルールが存在していた。
- (32) 以下の経緯で起こったことである。男性普通選挙が実質化した1916年以後、急進市民同盟の政権が続いたのち、1930年の軍のクーデタ以後、不正選挙でオリガルキアの代表が勝利する時代となっていた。その時代をベロンが中心人物であった1943年のクーデタが終わらせ、その軍政からの民政移管の選挙において、ベロンが新しい政党を作って候補となった。
- (33) なお、先に紹介したように、ハゴピアンがアルゼンチンにおける伝統政治の重要性を見損なったのは、同国政治での周辺部の役割が十分に重視されておらず、オリガルキアとしてパンパ・ブルジョアジーのみが主に考えられていた時期の考察だったことから当然とも言えよう。ただし、修正解釈を全面的に採用することも危険である。PJの州ボス政治家の中には、政治権力により経済権力を築いた性格が強い人々、一家も多い。この点は、ハゴピアンの言うような「伝統的エリート」のパワーを問題にすべきなのか、一般にサブナショナル非民主主義が重要なのかという問題と関連する。ハゴピアンは、ラテンアメリカ一般を扱った議論の中で、すでに伝統的エリートは経済活動を多様化し、農村に基盤を置く農業エリートに限られなくなっており、経済的条件では定義しづらく、「おそらくより正確には、一連の国家機構と政

治過程を支配し、限られた数の家族の中に政治・経済権力を集中する権力保持者のクローズドサークル」と概念化するのが適当だと述べても、メキシコのように革命後に登場して権力を集中する政治エリートは「政治的オリガーキー」と呼びうるが「伝統的」ではないとして、土地・農業起源のクランであることを重視し続けている (Hagopian [1996b: 67-69])。しかし、メキシコの農村部の非民主主義的な支配は、本章で扱う州政治と同種のものに思える。おそらく、市場原理に基づく競争的な経済での成功を基盤にし、そうした経済を志向する豊かなエリート層とは異なる社会性と指向性を持ち、少数の一族の中に経済・政治権力を集中するようなエリート層を一つのカテゴリーと考えることができ、その統治が特定の性格を帯びやすいことを前提として、そのうちで非民主主義的な性格が強いものを「伝統支配」と呼んでもいいのではないかというのが、筆者の現在の暫定的な考えである。この点は筆者の今後の検討課題としたい。

- (34) よって、貧しい程度に応じてパトロネイジによる政権党への支持獲得が安価になる周辺の州に、多くの配分が行われる (Gibson et al. [2004: 191] を参照のこと)。
- (35) そうした通説的な解釈からは、カルドゾ政権が新自由主義改革を遂行できたことは、連合形成能力なども含め、基本的には「リーダーシップ」とまとめうる要因、すなわち、制度のもたらす困難を回避することを可能にする、いわば外生的な要因に求められることになる (Samuels and Mainwaring [2004: esp. 90-94, 110-113, 121-124])。
- (36) サブナショナルな非民主主義についての一般論を展開した論考 (Gibson [2008: 20-21]) の中でギブソンは、知事が中央政府の議会に「提供」できる議員の数が多いため、全国レベルの政治におけるその交渉力が増すため、州レベルのヘゲモニー政党制とその州の過大代表とが結び付きやすい (過大代表されている州の知事ほど、全国レベルの政治勢力にその州での権威主義体制の維持を容認させやすい) という一般命題を提出している。
- (37) 1994年の改正以後、ブラジルでは、大統領選挙、議会選挙、州知事選挙などが同時に行われる。
- (38) 2002年大統領選挙において副大統領候補を右派政党から出して勝利し、その後の政権でも連合を続けることに典型的に見られる。
- (39) これらの概念は、クライエンテリズムに関する優れた研究動向論文 (Stokes [2007: 604-605]) による。
- (40) 先に紹介した論文 (Hunter and Power [2007: 7-8]) は、2006年選挙においてルーラが得票を拡大したのが、それまでのブラジルの現職大統領に共通することを述べた上で、それに引けずられて労働者党が得票を拡大する現象が顕著でない点で従来と異なること、また、ルーラが得票を拡大したのが貧し

い諸州であるのに対し、労働者党は都市化・工業化した地域で強力であることを指摘し、(元来の)労働者党の支持拡大力学とルーラ政権のそれとが異なっていたことの現れであると見ている。しかし、それらの現象は、ルーラ政権による物質的利益の分配に基づく支持拡大が、従来のように地方の媒介者を介して行われなかったことを示す証左としても解釈できよう。

- (41) 広い注目を集めたボルサ・エスコーラは、就学年齢の子のある家庭に子供の就学を条件に一定額(子供1人について一定額で、3人分まで)が支給される政策であり、その後、同種の条件付き現金給付が、カルドーズ政権期に2つ、ルーラ政権の初期に2つ始まっていた。ボルサ・ファミリアは、その4プログラムを統合したものである。
- (42) 様々な側面において、ルーラ政権はカルドーズ政権が始めたブラジル政治の変容を継承しているにすぎないという近田(近田[2008]など)に加え、2009年6月23日の個人的なコミュニケーション)の解釈は、伝統政治に打撃を与えたのがカルドーズ政権であったとの解釈と適格的である。
- (43) Partido do Movimento Democrático Brasileiro (PMDB)は、軍政下の反対派政党が改名したものだが、民政移管の際に、伝統政治を特徴とする政治家が大量に加わった。その状況で、社会民主主義的な政党となることを掲げて離党した人々(カルドーズなど)を中心に結成された政党が、ブラジル社会民主主義党(Partido da Social Democracia Brasileira: PSDB)である。
- (44) ハゴピアン(Hagopian [1996b: 80-81])は、ラテンアメリカ政治一般に、伝統的エリートが新自由主義的改革、特にそのうちでもパトロネイジ資源の減少に関わる部分——貿易自由化や賃金抑制などは異なる——に抵抗するため、伝統的エリートのパワーが強いところでは新自由主義改革が進みにくい、との命題を提出している。なお、この命題は、連邦政府については、その領域での改革が進んだが、州政府については放漫財政が容認された——それが、2001年末危機の最大の基盤的要因になった——アルゼンチン(ハゴピアンが伝統的支配層のパワーが強くないために、改革が進んだとしているはずの)にも当てはまることになる。言うまでもなく、本章とハゴピアンとのこの点での解釈の差違は、アルゼンチン伝統的支配層のパワー一般に関する理解の相違に対応している。
- (45) この点は、ルーラ期になった時期の議員への意識調査を1990年のそれと(3つの質問への回答で)比較した研究(Power [2008: esp. 96-101])の知見(解釈)でもある。
- (46) 先行研究を紹介しつつ、彼が労働者党が変わってしまったと考える時期までの変化をそのように解釈しているハンターの議論(Hunter [2008: 18])などがある。
- (47) *Economist*, 390 (8624) (March 28th. -April 3rd., 2009), pp. 42-43の記事、

“Governors under Fire” など。

- (48) 憲法上の権限として、連邦大統領は州知事を廃しての「介入官」任命などを行える。
- (49) この点については、PJの「地方ボス」についての研究を続けてきた篠崎英樹も同じ見解を示している（2009年6月17日の個人的なコミュニケーション）。
- (50) もう少しだけ詳しく経緯を述べれば、次のとおりである。軍がペロニスモの選挙参加を全面的に許すようになった結果、1973年にPJの候補が大統領選挙に勝利し、その辞任による再度の選挙で、今回は本人の出馬が許されたベロンが大統領になる。高齢だったベロンが翌年死亡し、副大統領であった彼の配偶者（それ以前の政治経験が欠いていた）が大統領になったところから、1960年代末以来の政治の暴力化が激化し、経済的不安定化も昂進し、1976年3月にクーデタによって極度に抑圧的で、政治活動を厳しく禁止する軍政が登場した。経済運営の失敗、そして、マルビーナス（英名フォークランド）諸島の軍事的占領による英国との戦争での敗北などによって、軍が全く信頼を失った形で、1983年の民政移管がなされ、その後民主主義が維持されるようになった。
- (51) 先記の2001年末からの危機の際に、短期間暫定大統領にもなった政治家である。
- (52) ただし、メネム政権を委任民主主義的だとする一般的理解だったものに対する重要な修正解釈として、レヴィツキーによる一連の現状分析的な考察（代表的なものとして、Levitsky [2000]）がある。
- (53) 民主主義への移行が起こった1983年から2003年までについて、州政府の政権党が交代した回数からの点数化（同一人物や近い家族や友人が常に政権にある場合を最低として）、知事選の第1回投票での知事の党（またはその連合）の得票率（以下平均）、州議会における有効政党数（対数）、直接選挙となった1989年以後の期間の州選出の連邦議会上院議員の中での党出身者の比率であり、因子分析により、それらが一つにまとめることを確認して用いられている。
- (54) 大都市部におけるPJの変容に関する実証的研究は、2003年出版の著作にまとめられている（Levitsky [2003]）。
- (55) 先に述べたように、クライエンテリズムを脱却する参加的な政治が見られるものとして、都市部の社会運動（や、それに基づく地方自治体政治）が多く研究対象となってき、大都市部において労働運動に基盤を置く性格が強かった政党がクライエンテリズムを特徴とする政党へと変容したことが注目を集めてきた。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- 宇佐見耕一 [2006] 「アルゼンチン・キルチネル政権の中間評価」(『ラテンアメリカ・レポート』第23巻第2号 45-50ページ)。
- [2008] 「中道左派の結集を図るアルゼンチン・キルチネル政権」(遅野井・宇佐見編 [2008: 143-174])。
- 遅野井茂雄・宇佐見耕一編 [2008] 『21世紀ラテンアメリカの左派政権——虚像と実像——』アジア経済研究所。
- 近田亮平 [2008] 「ブラジルのルーラ労働者党政権——経験と交渉調整型政治にもとづく穏健化——」(遅野井・宇佐見編 [2008: 207-237])。
- 篠崎英樹 [2007] 「地方ボスの台頭——ペロニスタ党の組織変容からの一考察(1983—1987)——」(『ラテン・アメリカ論集』第41号 47-64ページ)。
- [2008] 「アルゼンチンにおける地方ボス研究——ペロニスタ党の事例を中心に——」慶應義塾大学ラテンアメリカ研究自主ゼミ(2008年11月17日)における未公開の報告資料。

<外国語文献>

- Ames, Barry [2001] *The Deadlock of Democracy in Brazil: Interests, Identities, and Institutions in Comparative Perspective*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Amorim Neto, Octavio [2002] “The Puzzle of Party Discipline in Brazil,” *Latin American Politics and Society*, 44(1), pp. 127-144.
- Armijo, Leslie Elliot, Philippe Faucher and Magdalena Dembinska [2006] “Compared to What? Assessing Brazil’s Political Institutions,” *Comparative Political Studies*, 39(6), pp. 759-786.
- Auyero, Javier [2000] *Poor People’s Politics: Peronist Survival Networks and the Legacy of Evita*, Durham: Duke University Press.
- [2007] *Routine Politics and Violence in Argentina: Gray Zone of State Power*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Avritzer, Leonardo [2002] *Democracy and the Public Space in Latin America*, Princeton: Princeton University Press.
- Benton, Allyson Lucinda [2003] “Presidentes fuertes, provincias poderosas: la economía política de la construcción de partidos en el sistema federal argentino,” *Política y Gobierno*, 10(1), pp. 103-137.
- Botana, Natalio R. [2006] *Poder y hegemonía: el régimen político después de la crisis*,

Buenos Aires: Emecé.

- Brusco, Valeria, Marcelo Nazareo and Susan C. Stokes [2004] "Vote Buying in Argentina," *Latin American Research Review*, 39(2), pp. 66-88.
- Cabrera, Ernesto [1996] "Ballotage versus colegio electoral. Sistemas electorales y elecciones presidenciales en Argentina," *América Latina Hoy*, 13, pp. 81-92.
- Calvo, Ernesto, and María Victoria Murillo [2005] "The New Iron Law of Argentine Politics? Partisanship, Clientelism, and Governability in Contemporary Argentina," in Levitsky and Murillo eds. [2005: 207-226].
- Cheibub, José Antonio, Argelina Figueiredo and Fernando Limongi [2009] "Political Parties and Governors as Determinants of Legislative Behavior in Brazil's Chamber of Deputies, 1988-2006," *Latin American Politics and Society*, 51(1), pp. 1-30.
- Eaton, Kent [2005] "Menem and the Governors: Intergovernmental Relations in the 1990s," in Levitsky and Murillo eds. [2005: 88-112].
- Fenwick, Tracy Beck [2009] "Avoiding Governors: The Success of Bolsa Familia," *Latin American Research Review*, 44(1), pp. 102-131.
- Gervasoni, Carlos [2006] "A Rentier Theory of Subnational Authoritarian Enclaves: The Politically Regressive Effects of Progressive Federal Redistribution," Paper presented at the 2006 Annual Meeting of the American Political Science Association.
- Gibson, Edward L. [1997] "The Populist Road to Market Reform: Policy and Electoral Coalitions in Mexico and Argentina," *World Politics*, 49(3), pp. 339-370.
- [2004] "Federalism and Democracy: Theoretical Connections and Cautionary Insights," in Gibson ed. [2004: 1-28].
- [2005] "Boundary Control: Subnational Authoritarianism in Democratic Countries," *World Politics*, 58(1), pp. 101-132.
- [2008] "Subnational Authoritarianism and Territorial Politics: Charting the Theoretical Landscape," Paper presented at the American Political Science Association Annual Congress.
- Gibson, Edward L., ed. [2004] *Federalism and Democracy in Latin America*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Gibson, Edward L., Ernesto F. Calvo and Tulia G. Falletti [2004] "Reallocative Federalism: Legislative Overrepresentation and Public Spending in the Western Hemisphere," in Gibson ed. [2004: 173-96].
- Hagopian, Frances [1992] "The Compromised Consolidation: The Political Class in the Brazilian Transition," in Scott Mainwaring, Guillermo O'Donnell and J. Samuel Valenzuela eds., *Issues in Democratic Consolidation: The New South American*

- Democracies in Comparative Perspective*, Notre Dame: University of Notre Dame Press, pp. 243–293.
- [1996a] *Traditional Politics and Regime Change in Brazil*, New York: Cambridge University Press.
- [1996b] “Traditional Power Structures and Democratic Governance in Latin America,” in Jorge I. Domínguez and Abraham F. Lowenthal eds., *Constructing Democratic Governance: Latin America and the Caribbean in the 1990s*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. 64–86.
- Hagopian, Frances, Carlos Gervasoni and Juan Andres Moraes [2009] “From Patronage to Program: The Emergence of Party-Oriented Legislators in Brazil,” *Comparative Political Studies*, 42(3), pp. 360–391.
- Hochstetler, Kathryn [2008] “Organized Civil Society in Lula’s Brazil,” in Kingstone and Power eds. [2008: 33–53].
- Hunter, Wendy [2007] “The Normalization of an Anomaly: The Workers’ Party in Brazil,” *World Politics*, 59(3), pp. 440–475.
- [2008] “The Partido dos Trabalhadores: Still a Party of the Left?” in Kingstone and Power eds. [2008: 15–32].
- Hunter, Wendy, and Timothy J. Power [2007] “Rewarding Lula: Executive Power, Social Policy, and the Brazilian Elections of 2006,” *Latin American Politics and Society*, 49(1), pp. 1–30.
- Jones, Mark, and Wonjae Hwang [2005] “Provincial Party Bosses: Keystone of the Argentine Congress,” in Levitsky and Murillo eds. [2005: 115–138].
- Kingstone, Peter R., and Timothy J. Power [2008] “Preface,” in Kingstone and Power eds. [2008: ix–xi].
- Kingstone, Peter R., and Timothy J. Power, eds. [2008] *Democratic Brazil Revisited*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Lamounier, Bolivar [2003] “Brazil: An Assessment of the Cardoso Administration,” in Jorge I. Domínguez and Michael Shifter eds., *Constructing Democratic Governance in Latin America*, 2nd. Edition, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. 269–291.
- Levitsky, Steven [2000] “The ‘Normalization’ of Argentine Politics,” *Journal of Democracy*, 11(2), pp. 56–69.
- [2003] *Transforming Labor-Based Parties in Latin America: Argentine Peronism in Comparative Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [2007] “From Populism to Clientelism? The Transformation of Labor-Based Party Linkages in Latin America,” in Herbert Kitschelt and Steven I. Wilkinson eds., *Patrons, Clients, and Policies: Patterns of Democratic Accountability and*

- Political Competition*, New York: Cambridge University Press, pp. 206–226.
- Levitsky, Steven, and María Victoria Murillo [2005] “Building Castles in the Sand? The Politics of Institutional Weakness in Argentina,” in Levitsky and Murillo eds. [2005: 21–44].
- Levitsky, Steven, and María Victoria Murillo, eds. [2005] *Argentine Democracy: The Politics of Institutional Weakness*, University Park: Pennsylvania State University Press.
- Mainwaring, Scott [1995] “Brazil: Weak Parties, Feckless Democracy,” in Scott Mainwaring and Timothy P. Scully eds., *Building Democratic Institutions: Party Systems in Latin America*, Stanford: Stanford University Press, pp. 354–398.
- Mainwaring, Scott, Rachel Meneguello and Timothy J. Power [2000] “Conservative Parties, Democracy, and Economic Reform in Contemporary Brazil,” in Kevin J. Middlebrook ed., *Conservative Parties, the Right, and Democracy in Latin America*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. 164–222.
- Montero, Alfred P. [2005] *Brazilian Politics: Reforming a Democratic State in a Changing World*, Cambridge: Polity.
- [2007] “Uneven Democracy? Subnational Authoritarianism in Democratic Brazil,” Paper presented at the 2007 Latin American Studies Association meeting.
- Nylen, William [1997] “Reconstructing the Workers’ Party (PT) : Lessons from North-Eastern Brazil,” in Douglas A. Chalmers, Carlos M. Vilas and Katherine Roberts Hite eds., *The New Politics of Inequality in Latin America: Rethinking Participation and Representation*, New York: Oxford University Press, pp. 421–446.
- Power, Timothy J. [2000] *The Political Right in Postauthoritarian Brazil: Elites, Institutions, and Democratization*, University Park: Pennsylvania State University Press.
- [2008] “Centering Democracy? Ideological Cleavages and Convergence in the Brazilian Political Class,” in Kingstone and Power eds. [2008: 81–106].
- Samuels, David [2003] “Fiscal Straitjacket: The Politics of Macroeconomic Reform in Brazil, 1995–2002,” *Journal of Latin American Studies*, 35 (3), pp. 545–569.
- [2004] “From Socialism to Social Democracy: Party Organization and the Transformation of the Workers’ Party in Brazil,” *Comparative Political Studies*, 37 (9), pp. 999–1024.
- Samuels, David J., and Scott Mainwaring [2004] “Strong Federalism, Constraints on the Central Government, and Economic Reform in Brazil,” in Gibson ed. [2004: 85–130].
- Santos, Fabiano, and Márcio Grijó Vilarouca [2008] “Political Institutions and Govern-

- ability from FHC to Lula,” in Kingstone and Power eds. [2008: 57–80].
- Sawers, Larry [1996] *The Other Argentina: The Interior and National Development*, Boulder: Westview Press.
- Schamis, Hector E. [2006] “Populism, Socialism, and Democratic Institutions,” *Journal of Democracy*, 17(4), pp. 20–34.
- Snyder, Richard, and David J. Samuels [2004] “Legislative Malapportionment in Latin America: Historical and Comparative Perspectives,” in Gibson ed. [2004: 131–172].
- Stepan, Alfred [1999] “Federalism and Democracy: Beyond the U.S. Model,” *Journal of Democracy*, 10(4), pp. 19–34.
- Stokes, Susan C. [2007] “Political Clientelism,” in Carles Boix and Susan C. Stokes eds., *The Oxford Handbook of Comparative Politics*, Oxford: Oxford University Press, pp. 604–627.
- Weyland, Kurt [1996] *Democracy without Equity: Failures of Reform in Brazil*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- [2002] *The Politics of Market Reform in Fragile Democracies: Argentina, Brazil, Peru, and Venezuela*, Princeton: Princeton University Press.